

「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学部 3 年 伊藤拓馬

今回のフィリピン研修は、私にとって初めての海外渡航経験であり、非常に有意義な時間となりました。CFO で行われている渡航前研修に参加したり、海外移住者や帰国者に対する支援活動を行う NGO を訪問したり、アジア開発銀行でお話を伺ったりする中で、フィリピン国内の構造的な問題点はもとより、外部の目から見た日本の問題点についても気づかされることが多くありました。

私は今年度前期から安里特定准教授のもとで、フィリピンからの移住女性、および彼女たちと日本人男性との間に生まれた子どもたち(JFC: Japanese-Filipino Children)に関する問題について講義を受け、一方で京都市内の小学校で JFC に対する学習支援ボランティアに取り組んできました。その中で、腑に落ちない疑問を抱いていました。外国人の包摂に関して日本の取り組みは決して進んでいるとは言えません。労働のために来日する外国人の多くは介護や工場労働など日本人が好まない職業に就き、さらに給与の天引きや長時間勤務といった不当な労働条件を強いられている場合も少なくはありません。彼らはなぜ、搾取されるリスクがあるなかでそのような選択をするのでしょうか。

実際にフィリピンの現実を目の当たりにし、その疑問が解消されました。経済格差、労働市場における供給過多。さらに、雇用契約は 6 か月ほどで打ち切られることが当たり前、という事実を知り衝撃を受けました。最低賃金に対する物価が決して低いとは言えない経済状況で、安定した職業に就くことができずに貧困に陥る人が後を絶ちません。そうした状況下で多くの家族を養う必要性に迫られれば、日本を含む海外へと出稼ぎに出ることは魅力的な選択肢となります。フィリピンの GDP の 10% を海外出稼ぎ者による送金が占めているという原因はここにありました。国内産業の脆弱さと過剰な労働力が、ある種「人」を商品として外国へ輸出する構造を生み出していたのです。

さらに問題となるのが、海外へと移住あるいは出稼ぎに出ようとしている人々が、渡航先の国・地域に関してあまりに無知であり、楽観的であるという事実です。実際、CFO で渡航前研修に参加していた女性たちとディスカッションをするなかで、彼女たちが日本に対してあまりに肯定的なイメージを抱いており、「日本に行けばなんとかなるだろう」という安易な認識を持っていることがわかりました。ここには、日本の構造的な問題点が外部から見えづらいうということも関係しているのかもしれませんが。

フィリピンと日本の差異として、問題の可視性・不可視性が挙げられます。フィリピンでは、街を歩けば問題はすぐ目につきます。乱立する高層ビルの背後に広がるスラム街、夜の街で物乞いをするストリートチルドレン、道路渋滞はひどくその隙間を縫って水や食料を売ろうとする商売人が闊歩していました。金を得るためには何でもしようとするその姿に、貧困の現実があらわれていました。一方で、日本に目を移すと、あからさまな貧困の実態や労働搾取といった問題点は容易には捉えることができません。臭い物には蓋をする。正直なところ、私自身も安里特定准教授の講義を受けるまでは日本国内のこのような問題についてはほとんど知らなかったというのが事実です。日本のことをよく知らない外国人が、日本は安全で豊かな国であるというイメージをもつのはなんら不自然なことではないでしょう。実際には、その閉鎖的で伝統に固執した制度基盤が様々な弊害をもたらしているにもかかわらず、です。

本研修は、自らの見識を深める上で非常に実り多いものでしたが、一方で自分の意見をうまく表現できないもどかしさも強く感じました。英語力の問題だけではなく、いかに普段から自分自身の行動や日本という国について顧みていなかったかを痛感させられました。今後は、より実践的な英語力の向上を目指すとともに、今回の研修を通して得られた知識を深め、JFC への学習支援などを通じて両国間の友好的なネットワークの形成のために少しでも力になれるよう努力していきたいと思えます。